

景観の中の土木遺産

自然の脅威から身を守るべく、また自然の恩恵をより深く受けとめるために、土木技術は生まれ、広まった。土木施設が第二の自然と呼ばれ、土木技術者は地球の彫刻家だという自負が漲った時代もあった。だがさまざまな技術の発展とともに、人類が自然に及ぼす影響は急速に拡大した。それは古代にも自覚され、今日世界遺産に指定されているレバノン杉も、過剰な伐採により激減することを懸念したローマ皇帝が森林保護に乗り出した事実がある。さらに産業革命以降、近代技術による自然改造の規模と速さは国家的規模で、そしてついには地球規模で自然の変容をもたらす事態にいたった。太古より自然は天変地異を起こし、自ら相貌を変えてきてはいる。20世紀末には自然破壊の元凶であるかの如く指弾される場面も見られた土木事業も、人類の生存を持続させるためのやむをえない自然介入行為であったことは歴史が教えるところである。人口規模に見合った社会基盤整備が行われてきた地域もあれば、既に過

剰になりつつある地域も見受けられる。そしてまだ基盤整備が必要な場所も確かにある。そのような中、原生自然の中で生きる知恵から遠ざかった人類社会にとって、環境を軸とした知識革命こそ今世紀の課題であることは疑いない。

今、土木に問われているのは、自然を極端に損なうことなく、甘美を承知で言うならば融和していく姿を理想とする、別の言葉で表現すれば風土の一部に組み込まれていく形で、土木施設が築かれるかどうか、ということであろう。それでは日本の土木は風土に対してどのように対面してきたか。風土と言えれば必ず言及される、日本社会の近代化のあり方が問われ始めた昭和初期に、哲学者の和辻哲郎が著した『風土 人間学的考察』は、実存主義哲学者ハイデガーの『存在と時間』の影響を受けて、地球上のさまざまな地域の風土と文化、思想との関連性を追及した著作である。「風土が人間に影響する」という和辻の思想は安易な環境決定論だとの批判があ

る一方、風土という考え方こそが地球規模の均質化に傾斜するグローバリゼーションを押しとどめる上で、有効な方法論だとするフランスのオギュスタン・ベルクによる再評価もある。

明治維新後、日本社会が受け入れ、推進してきた近代化の証拠物件である土木施設は、今では近代化遺産と呼ばれ、地域の景観の中に歴史の刻印として遺されるようになっていく。景観とはさまざまな場所の環境の視覚像、即ち風土の姿形に他ならないとすれば、第二の風土を築き上げてきた土木施設にも無関係な議論ではない。ある場所の景観がそこにあるように視覚像として見えるということ、その景観を風景として美しく感じるかということ、多くの場合次元が異なる。景観が風景として人々の情緒を揺り動かす時、それは土木施設本来の機能とは異なる価値の発現を意味する。普遍的な理論に基づく土木技術の成果である土木遺産も、実は局地的な環境との対峙と融合のせめぎ合いの帰結で

あり、地域の風土の中で風景の一部として感受されるのであれば、その場所に蓄積された歴史の証左を社会が受け入れたことを意味する。当初想定された土木施設の本来的機能を終えても、その存在自体が別の価値や意味を生んでいるのであれば、それを正しく認識し持続させていくことが次世代の課題になる。

大規模な土木事業により日本の山河は、少なくとも人間が生息する場所の近傍では大きく変容した。遺憾ながら量多くして粗雑であった面も否定はできない。土木技術者は地球の彫刻家だと自負するのであれば、本当の意味での彫琢はこれからである。景観を見る目を通して環境の履歴を再整理する姿勢を土木技術者が磨くことこそ、職能としての責務ではないか。景観の中の土木遺産はその目を養うための先人の恩物に他ならない。

旧信越線碓氷第三橋梁
(写真 初芝成彦)

窪田陽一

KUBOTA Yoichi

■経歴:

1951年10月生まれ、静岡県清水市(現静岡市)出身、東京大学工学部土木工学科卒(1975年)、東京大学大学院工学系研究科博士課程修了(1980年)、工学博士、埼玉大学工学部建設工学科助手・同助教授・同教授を経て、2002年より埼玉大学大学院理工学研究科教授に就任し、景観工学・都市計画・近代土木史の研究教育に携わる傍ら、摺上川ダムや東京港臨海大橋(仮称)等各種公共事業の景観アドバイザーとしても活躍中。国際交通安全学会著作賞受賞作「ネオバロックの灯:四谷見附橋物語」他著書・受賞歴多数。

